様式７　発表会抄録

在宅生活を送る重症心身障がい児者における理学療法介入頻度と介護負担の関連

学籍番号　07M2413　　氏名　　菅田 奈々子

１．研究目的

理学療法士として障がい児と関わる場合、介護を担う親とも密接に関わる必要があることが多い。障がいを持つ子供にとって、親はかけがえのない存在であり、また一番身近な環境因子の一つでもある。介護者の健康状態及び介護負担度と理学療法介入頻度に着目し、現状における理学療法介入が介護者の健康に何らかの変化をもたらしているのかについての把握すること、及び介護者の希望と現状との間に生じている乖離に対する理学療法士としての関わり方について検討することを目的とした。

２．対象と方法

1)対象及び方法：社会福祉法人全国重症心身障がい児(者)を守る会青森県支部に所属する会員、及びその関係者のうち在宅生活を送る重症心身障がい児者の主介護者106名に対して自記式無記名式アンケートを依頼し、郵送にて回収した。回収期間は平成22年11月7日～22日で、回答を得られた49名の対象者のうち、被介護者が身体障害者手帳1～2級及び療育手帳Aの両方を所持していると回答した42名（被介護者の母39名、父2名、続柄不明1名、平均年齢49.6±14.8歳）を統計解析の対象とした。

2)調査内容：被介護者の年齢や手帳の有無・日常生活状況等の情報、主介護者の年齢等や介護負担度及び健康状態、理学療法利用頻度及び時間、理学療法頻度に対する満足度、理学療法に対する希望(自由記述)を調査した。介護負担度に関しては、Zarit介護負担尺度(Zarit Caregiver Burden Interview）の日本語版の短縮版（J-ZBI_8）を使用した。介護者の健康状態は、精神的健康度（General Health Questionnaire）の12項目短縮版（GHQ-12）及び、身体的不調の有無について尋ねた。GHQ-12は、GHQ法を用いて点数化した。

3)解析方法:統計ソフトSPSSを用いてPearsonの相関係数及びSpearmanの順位相関係数による解析を行った。自由記述欄に関しては、カテゴリー分けを実施し、傾向を観察した。

３．結果

- 介護者をとりまく状況及び理学療法利用頻度への満足度：J-ZBI_8の総合点と、被介護者の呼吸管理の有無・食事機能の状態との間に5%未満で有意な正の相関があった。GHQ-12の総合点と、被介護者の呼吸管理の有無との間に5%未満で有意な正の相関があった。現状における理学療法利用頻度の満足度は17名が「十分」とする一方で、24名が「少ない」と回答した。
- 理学療法介入頻度と介護者の介護負担・健康状態との関係:理学療法利用頻度・時間と、J-ZBI_8の総合点、及び理学療法利用頻度・時間と介護者のGHQ-12の総合点及び身体的不調の有無の間に有意な相関は見られなかった。
- 理学療法士に対する希望：被介護者の状態に関して指導を受けることができているという声がある一方で、納得のいく説明のないまま一方的に理学療法頻度を減らされたり、求めている情報が得られないなどといった声が多く寄せられた。子供の成長につれ、介護者自身が加齢により衰えていくことに対する不安の声もあり、負担がかかりにくい介助方法の指導や健康不安に対する相談などを希望として挙げる声も多くあった。

４．考察とまとめ

理学療法介入頻度と介護負担及び介護者の健康状態との関係において、有意な相関はみられなかったことから、介護者に対するアプローチは現状においては不十分な状態であることが分かった。理学療法士への希望に挙げられた内容から、被介護者に対するアプローチはもちろんのこと、介護の状況や健康状態についても知り、自身の加齢に伴う不安など様々な言葉を理学療法士側から聞き出し、受け止める努力が介護者から求められているのではないかと考える。